

暁炎の牢

ぎょうえん

ろう

囚われの龍と

冷徹な博士が溶け合うまで

KirR

【ご注意】

本作は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧・購入はご遠慮ください。

※この作品には次の描写を含みます。

監禁／同意のない性行為／残酷描写

※作中の行為や思想を肯定・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションであり、実在の国・人物・団体とは一切関係ありません。

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。

暁^{ぎょうえん}炎の牢

く囚われの龍と冷徹な博士が溶け合うまでく

K
i
r
R

「ぐっ、あぁっ！」

下半身を襲う強い電流に、紅蓮ホンリエンは悲鳴を上げる。真っ白になった頭は、自分に何が起こったのかを正しく認識していない。

勃たち上がったものは紅蓮の意思と関係なく、刺激に押されるように白濁を吐き出す。それは円錐状えんすいの容器に入り、管を伝って床下へと落ちていく。きっとその先で瓶かめに溜められ、日々の研究に使われるのだろう。

次の刺激が来るまでに、紅蓮は荒い呼吸を整えようとする。褐色の肌に大粒の汗が浮いているが、四肢が拘束され、拭うことはできない。

「ぐっ！」

再び電流が流れ、全身がピンと硬直する。痛みを感じているのに欲を吐く体は、もう馬鹿になったとは思えない。

紅蓮は自身を捕らえる檻おりの、透明な壁の向こうに目を向ける。そこでは多くの学者たち

が、紅蓮を見ながらせつせと記録を取っている。

その中に一人、微動だにしない男がいる。眼鏡の奥の黒い瞳は、ただ冷ややかに紅蓮を観察している。感情もなく、淡々と、たんたん淡々と。

紅蓮は男を睨にらつける。しかし縛られた体には何もできず、本日何度目の刺激に体を震わせた。



無機質な石壁に背を預け、紅蓮は「はあ」と深い息をつく。小さな声は反響もせず、広い室内に霧散していく。

体を揺るたび、首と手足に絡む鎖が音を立てる。枷かせで擦り切れた肌は、ところどころ赤みが滲にじんでいる。

この研究所に囚われてから、もう百年以上が経過した。透明な壁の向こうに見える観察室は少しずつ変化しているが、紅蓮を取り巻く環境は概ね変わっていない。

紅蓮は乱れた赤毛を揺らし、立てた膝に顔を埋める。この貴重な自由・時間に睡眠を取っておきたいが、この後のことを知る体は、眠ることに抵抗があるらしい。起きていたところで、何も変わらないというのに。

「おはようございます、劉博士^{リュウ}」

そんな言葉が聞こえ、紅蓮は顔を上げる。観察室に、先ほどまでいなかった眼鏡の男が立っている。劉と呼ばれたその男は、学者たちに感情のない顔で「おはよう」と返している。

「火龍の様子はどうか」

「昨夜は少し暴れたようです。今は大人しくしています」

学士の報告を聞きながら、劉は高く括った長い髪を揺らして紅蓮の檻に体を向ける。

「搾取に影響はないのかな？」

「はい。生殖器に問題がないことは確認できています」

「ならばいい」

劉は象牙色ちようさん ひるがえの長衫を翻す。そのやりとりはいかにも事務的で、紅蓮を実験動物としか思っていないのだとわかる。

それは本来神であるはずの紅蓮にとって、屈辱以外の何ものでもなかった。

大陸の東に位置するこの帝国は、かつて巨大な一頭の龍が支配していた。龍はやがて年老い、一つの卵を産み死んだ。その卵からは三頭の龍かえが孵り、それぞれ雷・氷・火の力を宿していた。

紅蓮はそのうちの一頭、火の力を宿す龍である。紅蓮は長い間、人に紛れて暮らしていた。しかし氷龍が紅蓮の居場所を明かしたことで、人間に囚われ、以来百年以上もこの地下室で飼われている。

人間たちの目的は、龍の力の軍事利用らしい。しかし具体的なことは何も知らず、紅蓮は

されるがまま、いたぶられる日々を送っている。

紅蓮は遠い目で天井を見上げる。高すぎるそれは、紅蓮が龍の姿に戻っても余裕がある設計だ。力が制御されている今はたどり着くことも難しく、着いたところで壊す力もない。

(いつまで、こうしてたらいいんだろうな……)

終わりの見えない悪夢に、紅蓮は再びため息をついた。

紅蓮は観察室に視線を戻す。そのとき、劉の切れ長の瞳と目が合った。

びっくりと、紅蓮の背筋が戦慄く。わなな射抜くような鋭い視線は、苦痛の始まりを意味していた。

次の瞬間、四肢を縛る鎖が引っ張られる。じやらじやらという大きな音と共に、部屋中央の台に向かって巻き取られはじめた。

「ぐっ……！」

紅蓮は必死に抵抗するが、鎖の勢いは止まらない。紅蓮はあつという間に台に引き寄せら

れ、台の上に乗るほかなくなる。鎖が全て巻き取られたとき、紅蓮は台の上で、大の字に固定されていた。

台が起き上がるように駆動し、紅蓮の体が斜め上を向く。滑り落ちそうな傾斜だが、がちりと拘束された体がずれる様子はない。

ふと視線を下げると、観察室の学者たちの視線が刺さる。毎日生まれたままの姿を見られているというのに、紅蓮は未だにこの視線に抵抗がある。

学者たちの先頭に立つ劉が、見慣れた機械の電源に手を添える。その途端、紅蓮の体が震え出し、喉の奥から引きつるような声が漏れる。

「やめろ！ 放せ、放せええ！！！」

紅蓮は必死に身を振るが、拘束が緩むことはない。抵抗も虚しく、劉は指先に力を込めた。

ブンという機械音に、紅蓮の体が反射的に強張る。まだ何も起こっていないのに、息が上

がり、心臓がどくどくと早鐘はやがねを打つ。

紅蓮は自分の股の間に目を向ける。台の切欠きりかきから銀色の棒が姿を現し、紅蓮に迫ってくる。それがどこを指しているのか、紅蓮はよく知っていた。

「嫌だ、いやだあああああ！！！！」

紅蓮はぶんぶんと首を横に振る。しかしその願いが届くことはなく、紅蓮の後孔に金属の冷たい感触が触れる。直後、それは容赦なく紅蓮を貫いた。

「バツッ！！！！！！」

痛い、と言いかけるが、痛みはない。体はとつくに棒に慣れ、抵抗なくずぶずぶとのみ込んでいく。

ほどなくして、棒の侵入が止まる。次の瞬間、ピリリと電流が紅蓮の体内を駆け巡った。

「ぐっ……！！」

紅蓮の意識とは関係なく、筋肉が収縮する。体幹が硬直し、つま先までピンと突っ張る。

「いつ、ぐっ」

弱い電流が、流れて、止まってを繰り返す。緊張と弛緩しかんが交互に訪れ、紅蓮の喉から潰れたカエルのような声が漏れる。

紅蓮の体は徐々に熱くなり、呼吸が荒くなっていく。ふと股間に視線を向けると、己の中心が上を向きはじめている。この刺激を快楽と勘違いしているのだろうか。だとしたらずいぶんと滑稽だ。

「ぐ、あ……ぐっ」

次第に電流が強くなる。全身から汗が吹き出し、紅蓮は歯を食いしばって痛みに耐える。しかし、この痛みはまだ最大ではない。それを知っているかのように、勃起上がった己は透明な蜜をこぼして震えている。

台の切欠きから、円錐状の容器が顔を出す。管のついたそれはブーンと音を立て、蜜をこぼすそこに覆いかぶさる。そして――

バチンッ

「あッ……！！！！」

強い痛みにも、紅蓮の頭が真っ白になる。全身が痙攣^{けいれん}し、中心から勢いよく白濁が飛び出した。

白濁は容器の管を通り、床下へと落ちていく。その下に瓶があり、そこに精液が溜められていることを紅蓮は知っている。この溜められた精液こそが、劉が率いる学者たちの目的だ。

「ぐっ、ああっ！」

電流が流れるたび、紅蓮の体がビクンと跳ねる。硬さを失わない己は何を勘違いしているのか、白濁を吹き出し続けている。

刺激を受け続ける紅蓮の姿は、きつと痛々しいだろう。しかし学者たちの中に、悲痛な表情をする者は一人としていなかった。

痛みが麻痺^{まひ}して感覚を失ったところ、ようやく中心を覆っていた容器が離れていく。後孔を貫く銀色の棒も引き抜かれ、台の下に吸い込まれるように収納されていった。

台がゆっくりと駆動し、元通り水平になる。じやらじやらと鎖が吐き出され、鳴り続けていた機械の音が止んだ。

自由になったはずの紅蓮は、未だ余韻で震えている。強い疲労感に襲われ、指先を動かす気力すらない。

透明な壁の向こうから、人々が動き出す音がする。きっと採取した精液を、次の実験場に運ぶのだろう。

(……疲れた)

後孔に痛みを感じながら、紅蓮はまぶたを閉じる。悲しくてたまらないはずなのに、乾いた瞳からは一粒の水滴すら生まれなかった。